

三河アララギ

平成二十七年

十月号

第六十二卷 第十号



ニューヨーク日記(108) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Facturas, Desayuno Argentino

Blue Shoe Diaries



マイアミからのお土産? 朝ごはんにぴったり! アルゼンチンのパン屋さんからファクトゥーラ。メデイアルーナはクロワッサンの形しているけどもうちょっとパンっぽくて少し甘い。黄色いクレームパティシエが付いてるのがビヒランテ。小さい頃からこれが一番好きだったかな。おいし～

Desayuno time with facturas from Buenos Aires Bakery in Miami! Churros, medialunas (de grasa & manteca), and the favorite vigilante.

目次

第六十二卷第十号(通卷七四二号)

表紙	ハマナス	今泉	由利(1)	落柿舎(1)	夏目	勝弘(27)	山迫	京子(36)
ニューヨーク日記(108)	Blue Shoe(2)	『いほとぶ』	いほとぶ(28)	森	厚子(28)	柳田	皓一(36)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	『俳句』		山崎	俊子(28)	米田	文彦(36)	
歌集「スモン」	大須賀寿恵(5)	現代学生百人一首	私の一首	三田美奈子	(28)	和田	勝信(37)	
歌集「草々」	今泉 米子(6)			水野	絹子(28)	植村	公女(37)	
白露の季	岡本八千代(7)			牧原	規恵(28)	正岡	子規(37)	
晩めっこ	今泉 由利(8)			稲吉	友江(29)	田中	清秀(38)	
鉦叩き	弓谷 久子(9)			鈴木美耶子	(29)	丸山	醉宵子(40)	
感謝	青木 玉枝(10)			吉見	幸子(29)	ある自然科学者の手記(41)		
糸瓜の蔓	内藤 志げ(11)			牧原	正枝(29)	絹の話(59)	大橋 望彦(42)	
悠悠自適	林 伊佐子(12)			岩瀬	信子(29)	短歌に詠まれた茂吉	今泉 雅勝(44)	
迎え火	安藤 和代(13)			石田	文子(29)	四十九回	鮫島 満(46)	
立秋	足立 晴代(14)			東洋大学	(30)	楽しい時間(35)	山本紀久雄(48)	
猛暑に耐え	鈴木 孝雄(15)			岡本八千代	(32)	「楽しくマナー」④	辻 照子(50)	
舞台	清澤 範子(16)			清澤	範子(32)	『歴代天皇御製歌』(四十二)		
何を待つ	伊藤 忠男(17)			近藤	映子(33)	貫屋海屋資料館(52)		
鬼子母神	森岡 陽子(18)			杉浦恵美子	(33)	(四十三)	(53)	
直走る	富岡 和子(19)			松本	周二(34)	落柿舎(1)	夏目 勝弘(54)	
これひとつ	遠藤 脩子(20)			山元	正規(34)	「氷魚」のことから(177)	岡本八千代(55)	
暑い葉月	近藤 映子(21)			今泉	由利(34)	ことのはスケッチ(442)	今泉 由利(56)	
さがらの森に	白井 信昭(22)			川井	素山(34)	編集室だより(二〇一五年 八月)		
東京の孫	半田うめ子(23)			小柳千美子	(35)	三河アララギ(58)		
手柄輝く	阿部 淑子(23)			重野	善恵(35)	和菓子街道(108)	平松 温子(59)	
積みし本	平松 裕子(24)			田中	清秀(35)	お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定	(60)	
津島天王宵祭	杉浦恵美子(25)			森岡	陽子(36)			
ツルムラサキ	山口千恵子(26)							

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

診療をつひにやめたり朝々になほ部屋めぐりて日めぐりを剥ぐ

P 1 9 1

夏空の白雲は北に低くしてゆらぐ篁の上に来たらず

P 1 9 1

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

やは肌の晶子を吾と語らひし老教育長は逝き給ひたり

かすかなる煙の影をうつしつ々蚊遣り燃えをりわが六畳に

石垣を覆へる蔦の茂りつ々重なれる葉の一つだになし

歌集 「草々」

今 泉 米 子

るり色のかすかなる花なよなよとほくそよげり真夏日照りに
仏桑華の今日のかがやくくれなるは昨日の花のしほみたるうへ

夕べ出でて庭のみちべに莖立てる三つ葉の芯葉三四枚つむ

あらがねの土よりいでて花のいろみな異なるを言ひたまひけり

引馬野を歩みたまひしよろこびの書簡いただきてより二十七年

千二百年前を標して石建ちぬ今日の港の潮澄みわたる

父の忌に母の忌を合せ営みて秋あたたかき一日暮れゆく

呆けたるは呆けたまると聞きながら朝餉の海苔をわがやきてをり

山肌は波立ち光る小笹原標高二千を吹き越ゆる風

秋葉の幟白くはためく寺の前吉良の冬日の光あつまる

白露はくろの季とき

蒲郡 岡本八千代

東ひんがしより淡きひかりがさしてくる白露とかいふ季ときのひかりぞ

しづしづと庭径みち歩めば白しろつゆの粒々光れり草々の上

いつしかにわが老いらくに気づきつつ夕影ぐさ草の白花見上ぐ

冷そうめん独り啜れるわが音のこのささやかさよなどか淋しゑ

形象派のデッサン大学勉強会きのふに了りてけふは雨降り

夫たちのデッサン大学と名付けたる合宿勉強も嗚呼六十六回

昨夜読みし「銀河鉄道の夜」の本またもやわれの空想つづく

風吹けば「風の又三郎」のあのリズム浮かびくるなりドッドドドドらが

ま白きのカングルのわが夏帽子今年の夏もつひに被かぶらず

夏帽子しまはむとすに夕茜ま白帽子にもその夕茜

睨めっこ

東京 今泉 由利

地球なる二〇〇〇年を費^つやしてベルセウス流星群の観測記録
額縁に青々海も描かるる鯛よ鰈よ中川一政

億年を石と化したる鬼やんま出逢えましたね睨めっこする

栗駒の山の雪解け水にて醸すやはらかき酒今年酒

常緑の雌雄同株椎の木今年の椎の実まずひとつ落ち

くるくると高速なるか超速か渦巻き渦巻きこの世の基本

遠目にも白白槍穂高々とパンパスタグラスはアルゼンチンより

奥多摩の山々覆ふ白雲は次第次第に私に来る

ふうわりとま白き雲に覆はれて自らの足確かめ確かめ

雨の手にあまる角材黙々と彫りゆく先の地蔵尊菩薩

鉦叩き

豊川 弓谷 久子

暑き日の暮れて満月ぽっかり浮ぶ文月葉月へと代はり行く夜
生き伸びて今年もあの日を歌に詠む七十年は長く短かし
空爆に逝きし友等を今日ひと日憶ひておらむ我が胸中に
工廠の廢墟の中に佇ちし日よ我が十八歳の暑き思い出
白菊に黄菊もまじりて一抱え心尽しの供華の届きぬ
迎え火も送り火も無し我の盆今年の盆も静かに終る
駅舎まで辿りつきしか出かけたる子の跡追ふごとこの俄雨
盗人萩も萩のうちかと育て来し花の咲かずに丈のみ伸びる
中天の赤味を帯びて半月に昼の暑さを暫し忘れむ
吊りしのぶたたき落して風強し日本海へと台風進む
老いの身は途惑ふばかり一ヶ月先の気候と今日なりたり
鉦叩きが今夜も庭に鳴きすだく酷暑の夏も終り近きか

感謝

新城 青木 玉枝

この時世老人天国有難や朝夕の生活たつき介護士の御手みてで

この歳になりても幼の想い出は消ゆる事なく安らぎの日び

蒲郡伊丹の友と途切れたる会話なき日々今更悔いても

あれ程に大事にしてくれた息子夫婦帰れない今感謝の続く

よそ行きの顔して今日は買物ツアー財布かかへて車に乗りぬ

店内を押車にて一めぐりひと財布と相談品物さがし

山里に二度目の夏を迎へたり朝夕想ひ出す故里の海

川原に立てばサラ／＼水の音流れ／＼て三河の海へ

ひと一人通らぬ山径眺めつつ人ひと人の伊丹恋しき

ゆつくりと今日のひと日は庭めぐりておし手押車たよりにてひと巡り

糸瓜の蔓

豊川 内藤 志げ

足許をしかと見つめつ藪の径落葉を踏むも久しぶりなり

帰り道藪蚊の径か日の照る道か傾りの木陰に暫く過しぬ

ようやくに日蔭となりし田の土手に腰を下しぬこの涼しさよ

涼まむと畦に腰かけ真向にあはあは白き月の見へ始そむ

早かんゆえか今年の糸瓜の蔓細し二株一つの瓶に押し入む

なよなよの蔓を切りたりたちまちに沁み出づるよ糸瓜の水が

細きよりぽりぽりと糸瓜の水一夜の内に瓶を満さしぬ

風もなき日の暮れ時に真白なる胡麻の一花静かに落ちる

両の手に水を掬いて顔を洗う幾年ぶりかそれ丈のこと

本宮山の遥か方に入道雲三河の奥に雨降りあるや

悠悠自適

岡崎 林伊佐子

汗にぬれる眼鏡ふきつつ草むし筆むしるその葉の香よ汗にまみれて
茄子の葉の裏に潜める天道虫も暑さを凌ぐか逃避はしない
薬剤をまかぬ畑にバッタも青虫も住むわれの野菜は
鋤の柄えもわが手の汗に艶光る長き縁を農に生ききて
半生はんせいを住宅地に棲み逝く友も施設に行きし友達おもう
子や孫に囲まれて生きる幸せに悠悠自適の老後をたのしむ
ふる里に昔のままに残る家住み人去りし世相の変転
ふる里の廢墟となりし集落に帰省するとき昔を偲ぶ
雑草の如く堪えゆくわが日々も障害持つ身の寂しき命
還かへらざる運命と思へど唐突にひ孫と遊べば聴覚欲しき

迎え火

豊川 安藤 和代

教員の採用試験に向う孫母の遺影に長き合掌

歌一首まとまらずして悩みおれば夕餉の煮物が焦げつきいたり

車椅子の夫と散歩に四ッ葉なるクローバ見つけ心うきうき

カサブランカしるく香るる夜の夢の父は若かり母も若かり

庭師さん鋏の音もリズムよく木ぎは忽ち正装となる

吾が胸に味よみがえらせて梨幸水透けて袋に輝の増す

祖父母父母嫁妹よおいでませ迎え火の先道しるべとし

暑さゆえ僧の御経もぼんやりと唯ただ聞こゆ蝉しぐれなり

孫子等の集いし夜も更けゆけば盆踊りの太鼓かすかに聞こゆ

外孫の育てし胡瓜かみしめばじわつと愛が胸にしみくる

立 秋

東京 足立 晴代

立秋の声聞きたるにほめく日の流るる汗瀧あせたきの如くに

星なき空におぼろなる満ちたる月の影浅くして

卒寿そつじゆをば越えたる先はいかなるや陰はしき坂も待ちてあるやも

幼き児水あびする様涼さましげにテレビに映る笑顔可愛かわゆし

夏の夜にあがる花火のこゝかしこ変らぬ四季の風情なりけり

日本中温度差少なくなりし今避暑地に行く人少なくなりしか

深緑繁れる樹々に囲まれり静かに過す生活望くらしのぞまむ

みまかりし父母夫ちちははつまの想い出を娘と共に語るかた楽しさ

涼しげに水面みづもに浮かびし水蓮れんの清きよらかにして白々と

岩手より連つらな赤きトマトの実供えし亡母の喜びさぞや

猛暑に耐え

沼津 鈴木孝雄

今時の海水浴はシャツを着てそのまま海に入るがやはり

富士山を背に海水浴の孫二人思い出出来たか「らららサンビーチ」

徒花のないはずのナス近頃は花を落とすは猛暑のはせいかな

他の野菜青息吐息で生き延びる水やりなしにトマトすくすく

今日も晴れいつになったら雨降るの暑き太陽にくにくにくし

三週間雨無く猛暑に耐えたシソ伸びた青葉に潤い戻る

善光寺裏小さな蕎麦屋石挽の十割そばの確かな香り

二ヶ月間食べきれない程よくとれたトマトの株を礼込めて抜く

台風が北から呼んだ寒气流暑かった夏も秋の気配に

クマゼミからツクツクボウシに替わりたり時を惜しみて夕暮れまで鳴く

舞 台

春日井 清 澤 範 子

八王子神社に詣で柏手を打ち歌一首書く舞台に座りて

立秋を前にして厨に立ちをりて耳を澄ませば蟋蟀の声

猛暑日に髪をショートにカットするさっぱりとして美容院を出づ

台所にて食器洗ひつつ聞きをれば鳥の声を蟬がかき消す

梅雨明けの予報あるも不安定にて俄かに雨は庭木を濡らす

吾が歩む道辺の田ぼは活着し回りの家並静かに写す

父母想ひ今日はなぜか泣けてくる鏡に向ひて笑顔してみる

公園の新緑の中に吾は居るブランコ揺れてサワサワの風

吾が姑ははは穏やかに吾をリードしてその優しさを忘れはしない

就職に挑せんしてゐる娘には涙見せまじ齒を食ひしぼる

何を待つ

大阪 伊藤忠男

昔なら願いを込める短冊に何を書けばと迷うこのころ

白い壁白い漆喰屋根瓦初々しさも今ならばこそ

夏なのかあきかそれとも梅雨時か季節分らぬ戸惑いの今

孫帰る寂しいことかと思いきやほっとするのは我だけなりや

虫の音に耳を傾けもの思ふ静かなその日いつ訪れる

高齢者後僅かにて次なるは後期と言われ気重くなる

秋風に誘われ歩く里の朝行き交う人の会釈うれしや

にじむ汗走る足音息遣いテレビの力これほとまでに

朝夕の心地よき風やはり秋残暑も忘れ窓開け放つ

鈴虫の鳴き声清く澄みわたるほのかに月の明かり背に

鬼子母神

東京 森岡陽子

川開き蕎麦をすすするは夏座敷浴衣の裾は川風にゆれ

水神の霊を慰む川開き享保の時より平成へ繋ぐ

鬼子母神合す手元に花柘榴境内は今朝顔の市

朝顔は遺伝子変へて多彩なる花は大きく花卉三角

墓守りをするよな蜥蜴姿見せ卒塔婆の後さつと隠れる

この夏の犬達と暮す我家では冷房切らぬ電気料幾ら

若者の好む映画へ友と行くそつと二人でニヤリニコニコ

秋めくも暑さの残る日暮れ時軒の風鈴涼しくひびく

竹細工網鬼灯に切れ絵花明け優しく行灯の展

直走る^{ひたはし}

東京 富岡陽子

かつてない猛暑つづいた十五夜にヨガ体操を独り楽しむ

立秋は次の週にてカレンダー名称だけでも纏る気持ちに

熱帯夜かぜに代りて公園はミンミンジーゾクゾク法師

暑い昼飯^{ひる}平目の切身を友は持ち我が厨にて煮つけてくれし

待ちし雨少し冷気にはころびてあれ虫の音は野菊のなかか

雨がえる背に兎をのせて緩りいるかのこ百合咲く旅のはじまり

蜘蛛の巣は電柵何ぞ三ツ四ツ去りゆく雨に糸を光らす

マツさんがリタと残したモルト酒に見学あまた試飲の豊富

時折に天気雨あり仕上りは英国に似た気風と味を

牧場も十勝平野も直走る^{ひたはし}高德道路うれしからずや

いねひつ

蒲郡 遠藤脩子

溜息は溜めずに吐けと我が通ふ医院の壁に貼られし言葉

深く深く息吸ひ込んで吐き出しぬ溜息溜むなと貼り紙のあり

エレベーターの壁の張り紙替へられて今日は細細こまごま認知の話

黄色の身を6の字に曲げ伸ばし露の葉陰にこの間見しイタチ！

挿し木して育ちし石榴に今年ひとつ結実したり枝重たげに

あれ一つこれひとつ済ませ日を過し渉らぬことの多くなりたり

無洗米に慣れて久しくほっとする滑らか手ざわりゆめぴりか研ぐ

縁側の沓脱ぎ石に鎮座する墓ひきがえると共に降る雨を眺む

いづくへか跡も残さず消え去りぬ我が心ときめかせたる大墓

緑なれど芝生とは言えずスミレ、カタバミ、カヤツリグサ蔓はびこ延る

暑き葉月に

名古屋 近藤 映子

猛暑雷雨台風十二号と文月末もニュースの続出

戦後七十年八月吾小学四年生疎開先のラジオの玉音に涙し

突然に落雷の音大つぶの雨の降り出す夕立の一時

八月六日甲子園高校野球の始まりぬ我が時習館出場は六十年余前

甲子園高校野球の始まりて今年百年とニュースは伝えぬ

猛暑38℃の名古屋クーラー作動に涼茶を飲み飲み

早や台風十三号の発生か猛暑の続く葉月の始め

葉月の十一日朝東京より届く大きな冬瓜は時習館六回生作る

続け居て良かった「三河アラギ賞」の知せ仏壇に供へぬ

家紋入盆灯ちんの青い灯はくるく廻る夜の一時

さがらの森に

豊川 白井 田信昭

薪割りの音吸い込まれ初夏の木の香棚引くさがらの森に

家近く豆腐売りの軽トラック懐かしいラッパの音聞こゆ

さがらの森尾根伝いに道上り一本木蔭は初夏の風はつなつ

咲き満ちる紫陽花の花愛で終えて「どんどん岩」に渡りくる風

屋上階見回り終えて暑かりき今日の落日は五井山のかなた

椎の木にヒメハルゼミの頻り鳴くこの夕間暮れに観察の人ら

中島の新幹線の高架下茂る土手草視界を遮る

高架毎吹き抜ける風に抱かれて犬と歩める引馬野小田

ま昼間の二階より見る青い田の波打てる風今日土用明け

酷暑日の暑さ続く今朝もまた犬に急かされ起き行く散歩

東京の孫

新城 半田うめ子

自動車の運転出来て免許はもらえぬなり右も左も分らぬ時あり

東京の孫の来たりて時どき味のよく食品を下さる

我と父と守り来たりし家はこわされて淋しかりけり

吾が屋敷昔より広くて岡山より八百年前越して来たりし

岡山の今泉村より新城へ移りこしこと本に残り居り

手柄輝く

横浜 阿部 淑子

真夏日の猛暑続きに喘ぎしが冷夏に比せば有難きかな

此の夏も特養祭りのボランティアしめの花火に行く夏惜しむ

花びらの黄色きわだつひまわりは茎も逞し北海道産

電柱を元より倒す台風の風速なんと七十米

「このとり」油井さんキャッチ成功し一等星並手柄輝く

積みし本

豊川 平松 裕子

この部屋に読まむと積みし本の山今やうやくに一冊読み終ふ

三四郎それからこころと納まりたるその一冊を今日読み終へぬ

雨は上がり隠れる^{こも}部屋の窓一杯広ぐる篁に日の射し来たる

雨音は等しく早く打ち続けただ一つ音部屋に響けり

北庭の苔のむしたる柿の木に我がくくりし風蘭活きづく

いづくよりこの雨雫の音するや立ちて見にゆく音する方へ

蝉の声かはた我が耳鳴りかガラス戸を開ければ瀬音の高く聞こゆる

密に立つ篁の竹こもごもに向きは違へどみな直ぐに立つ

雨雫の音は間遠くなりきたる雨の上がりて幾許の過ぐ

日の当たる葉に来て止まる蝶ひとつ日射し少なき北庭にして

津島天王宵祭

蒲郡 杉浦恵美子

今年こそ津島天王宵祭見物せんとぞ名鉄津島線

三度目は独り見て居り宵祭り父母夫共には果たせなかつた

ひとつひとつ灯吊して三時間三百六十五灯の光の傘成る

酎も飽きたし帰らん人波に逆らひ祭を抜け出しにけり

もう一度振り返りたる遠望に光の船が五艘浮かべり

ああ我はこの刻をこそ見に來たり三時間待ち僅か一瞬を

鬼灯を求めに行くも墓参りも提灯灯すも読経も独り

訪ふ人も無き孟蘭盆の日は長し接待無ければ所在も無いし

ピロリ菌除菌に成功これだけの些細なことだ夏空眩し

金魚掬い興ずる子供等少なくて金魚余れり村の地藏盆

ツルムラサキ

豊川 山口千恵子

すすくくと伸びたる先に五つ六つ花咲きかをる高砂百合は

中干の済みたる田の面しづまりて側溝を流るる水音さらさら

毎日を暑きあつき日続きつつ八月八日暦は立秋

朝出でて片手一ぱい欠きとりぬ露にぬれたるツルムラサキの葉

ツルムラサキ茹でてみどりの美しき朝の卵焼きにそへたり

鮮やかに酸漿赤く色付きぬ形もよろし色も美し

わが家の墓の回りの草をとり酸漿添へて花を供へぬ

風もなく夕暮れどきの墓の前線香の煙細く流るる

休耕の田に大豆の蒔かれたりさやさやみどり葉夏日にそよく

枯草を除けばコホロギすばやくて炎天にすでに秋の虫たち

落柿舎(一)

豊川 夏目勝弘

電気柵に囲はれ広き畑の彼方木立のなかに草葺きの屋根

元禄の八年の夏もかくあらん感ずる暑さはCO₂ならず

受付の準備に忙しげな庵主との会話は一本の柿の大木

落柿舎を守るは初老の夫婦にて日陰を見つけまず小休止

この暑さ癒せる所は落柿舎ぞ芭蕉は三度^{みたび}の滞在をせし

峠への目安の赤き大鳥居いざ峠への道にかからん

杉木立が日差しを防ぐ峠道上りくるエンジン音に山際に寄る

元禄の時世^{ときよ}をめぐらし八丁の上り路歩む汗拭きつづけ

爪先に力のかかる下り路の羊腸八丁人を見るなし

ようやくに足下より瀬音が聞こゆ芭蕉を追ふ旅腹のへる旅

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

初プールを大人五人に囲まれしも幼はビキニでこはごはとして
点滴を終へて元気戻りぬと言ひつつも母は風によるめく

森 厚子

二房の淡き緑の葡萄の実夏日に熟れつつその粒々よ

まつすぐに飛びくる燕あざやかにわが前を通りまた返しゆく

山崎 俊子

にが瓜の黄花ひと花ひと花と零れ落ちる夏の夕ぐれ

わが夫の墓碑開眼の読経聴くうから揃ひて真夏の墓原

三田美奈子

軽やかに「生れて生きて死んでく」と歌ふわが孫五歳の無心

この乳房に縋りてわれは生ひ来たり愛しみて拭く湯上りの母を

水野 絹子

台風の来襲の予報を聞く度に雨のみ降れとわれ願ひつつ

中学の三年をバスケに打ち込みし孫の試合も見に行かずして

牧原 規恵

目覚めゆく薄き意識のその中にけふ成す事のあれこれ思ふ

話題なる芸人の書きしこの「火花」買い求めたり今宵より読まむ

ペランダをつと飛び立つるは鳶らしき大き羽音に驚きゐる朝

東林院の縁に座れば沙羅双樹の咲きゐる白花散り敷く白花

朝早く庭の草取り済ませむと宗旦木僅の花咲く下に

読書するわが縁側の藤椅子に夫の姿は晴耕雨読

今朝のあさ鶯の鳴く女松山鳴き合ふ声の棲みつくほどに

ゆるゆると擦り始むるは「鴛華墨」墨の香ひろぐる一人の夜更け

雨あがり大きくのびたる夏草を今朝こそと夫は一気に取り出す

大暑の朝ひさびさの雨に若紫色の小さき柿の実みどりあざやか

朝食にオニオンサラダの甘き味夫が好みしわが家の定番

予約なき診察の日の待合に旧友に逢ひたり気も落ち着きて

稲吉友江

鈴木美耶子

吉見幸子

牧原正枝

岩瀬信子

石田文子

現代学生百人一首

東洋大学

【小学生の部】

ぼくは見た歴史に残るホームラン神宮球場大盛り上がり

コロナビインターナショナルスクール六年(埼玉県) 河野隼平

ちようちようがはなをめざしてそらをまうひらひらとんでしあわせはこぶ

コロナビインターナショナルスクール六年(埼玉県) 後藤希実

赤とんぼ秋が来るよと知らせてるみんなでわらう夕やけの中

文京区立明化小学校四年(東京都) 永山奈津

学校にケムシが一ひきまだ元気葉っぱですくって花だんにかえす

文京区立明化小学校四年(東京都) 山田秀

さくらさくせなかにズシリランドセルこころルンルンたのしい学校

白百合学園小学校一年(東京都) 佐々木陽子

しんきゆうだどきどきわくわく二年生友だちできてすごくうれしい

愛知教育大学附属名古屋小学校二年 岡田由香

こうようも山から里へ急ぎ足山をながめて秋がふかまる

奈良市立済美小学校五年 朝倉愛子

待ってたよ学校とび出し広島へみんなと歩くはじめての土地

西大寺北小学校六年(奈良県) 稲田和也

もみじの葉赤く色づきひらひらとふってはつもる秋のじゅうたん

西大寺北小学校六年(奈良県) 吉川碧生

新聞の一面かざる米軍のへりついらくにこころいらだつ

那覇市大名小学校五年(沖縄県) 栗^あ国^{ぐに}遥^{はる}大^と

私の一首

半夏^げ近き午後の日ざしが照らしくる今ありて動くわが影法師

岡本八千代

八月号の二首連作のうちの一首。

半夏^げというのは、田植えが済んだ頃のこと。その頃、私は体調をくずしていて、あわや入院かもということになっていました。ところが精密検査の結果、入院を免れたのでした。

その時の嬉しさが「今ありて」にこめられたつもりです。あの日の夕方の光りは淡い光りでありました。その中に動く私の影法師がいるではありませんか。その影法師も淡いよろよろの小さい姿。現実の私の愛^{いと}しい姿が。

椿の葉をピアノの鍵盤たたくように雨は降ります台風の風

清澤 範子

平成二十七年七月号より

今年は早くから台風に見まわれ、全国であちらこちらに、大きな被害をもたらしました。幸い私の地方は圏外にのがれてほっとしました。廊下のガラス戸から庭をながめると、ザーと大粒の雨が、剪定した椿の葉に、丁度ピアノをひく様に、はじけて流れ落ちる様子を詠みました。

わが夫の遺影をじっと見上げ見る線香上げる朝の一時

近藤映子

平成二十七年三月号より

毎朝この時間を持つことは、何時迄続くか？と思う、体が動く間は、と…。主人は子供と共に居る時は「お母さんく」と私を呼び、子供が近くに居い時は、日曜日などは映子さん映子ちゃん！と呼んだ。今娘が出勤後の朝新しいお水を上げて、手を合わせていると、ふと、主人が私を呼んだ様に思えて写真を見上げる、そんな錯覚におちいる時もあり、「はっ」として又、改めて写真を見上げたりして、「お早うございます。」とあいさつをする。

鼻濁音綺麗に発音するを聴くひとりの旅の小さな発見

杉浦恵美子

『三河アララギ』平成二十六年八月号

私見では歌の感動の中心は「小さな発見」にあると思うのですが、日常生活に流されているとなかなか気付きにくいものです。しかし旅に出ると見るもの聞くものすべて発見の連続です。この歌は東北への旅の途中、上野駅のベンチで列車を待つ間、構内アナウンスを聞いたときのもので、幼少期に鼻濁音を教わったことのない耳には、なんと柔らかく心地よい音かと聞き惚れ、同時に旅に出たわくわく感を覚えた瞬間でもありました。

『俳句』

たれよりも長き棹さし鯨の潮

松本周二

落蟬の仰臥の上の晴れ渡る

文月や乾したる藁の日の匂ひ

その中に流るるもあり星月夜

山元正規

鈍行の臨時列車三本在祭

とんぼうも一緒に休む歩荷の荷

月見草ほぐれゆく間の夕まぐれ

今泉由利

引力の目に見えしこと一葉落つ

五万石米より醸す新走り

ふはりきて蜻蛉の止まるモニユメント

川井素山

かなかなの声に仕舞へり野良仕事

冷めし茶の咽にやさしき残暑かな

いぼむしり道の真中に構へをり

小柳千美子

虫のこゑ母からの文読み返す

あとさきになりて蜻蛉と野川かな

薄暮れて市場込み合ふ残暑かな

重野善恵

風鈴や楽しげにまた寂しげに

黙々と背中に汗の宮大工

白雲に描く鳶の輪夏惜しむ

田中清秀

雲海の峰に重なる薄みどり

白妙に雲海たなびき峰近し

若者にテンポ遅るる秋暑し

森岡陽子

夏終る重い平和も七十年

豆腐屋の水に育つは洋目高

流星や沖に漁火点々と

山迫京子

赤とんぼ止まる仏の螺髪かな

虹二重しばし二重のしあわせを

トンネルを抜けて抜けても万緑や

柳田皓一

秋の日やポケットに文庫しのばせて

天敵や塩辛とんぼ伏せてをり

懇ろに写真拭ふや干蘭盆会

米田文彦

まなじりにきりきりと紅夏祭

文殻を焼べし煙や秋の風

お稽古の終り夏着に皺の有り

和田勝信

夏草の生ひ重なるや千枚田

文月や蕎麦饅頭の柔らかさ

戦死せし父に忌のなく沙羅の花

植村公女

向日葵のあつちばかりを向いてをり

少年の片耳ピアス三代目

秋立つやぼろりと落ちし蝉の殻

正岡子規

音もなし松の梢の遠花火

絶壁の草動きけり秋の風

かさね吟行会（休題）

「富士山御来光」

田中清秀

月明かり、満月ではなくても月が輝くと星の数が減る。中天には天の川と覺しき星雲が見られるが彥星や織姫星あるいは五星の十字架白鳥座は分からない。ただ幾つもの星が瞬いている。背負うリュックを岩とのクツションにして仰向けに夜空を眺めて暫くの休息をとる。海拔三〇〇メートルを超える富士の八合目付近ではダウンジャケットの上にウインドブレーカーを羽織っても風が強く、寒い。今は八月三日の午前一時、三回目の休憩である。澄み切った星空を眺めながら間違いない今、富士山頂を目指して登っているのだ。

丁度一ヶ月前、旅行社の店頭で偶然目にした富士登山のパンフレットこれを頼りにインターネットで検索する、まだ予約できる。行程は五合目から登山を開始七合目の山荘で一泊し翌朝の御来光を仰ぐというツアーである。妻の「行つてらっしゃい」と言う冷たい声援に押しされて早速申し込む。きつと山頂から見ると景色は素晴らしいだらう、天気さえ良ければ御来光も拝めるはずだ。

ツアー当日は晴天、下界は三五度を越える真夏日である。予定どおり五合目のドライブインで準備を済ませ登り始める、所謂「吉田ルート」、同行している添乗員も

参加し先頭の山岳ガイドとで十五人の参加者を前後に挟み全員並んでの登山である。今まで晴れたことが一度も無いと言う雨女の添乗員もビックリする程の天気、お陰で登り初めの山道では汗だく、しかしまだ余裕があり足取りは軽い。途中休憩で山岳ガイドから登山の心得や注意事項、高所での酸素不足による高山病対策、水分補給など親切な説明がある。ベテランのガイドである。

七合目の山荘に夕方の四時過ぎ順調に到着、前回登山の時はカレライスだったが今回はハンバーグ定食の夕食が準備されている。隣のパーティは外人、多分アメリカ人と思われる。富士登山は外国人にも人気のようでお替わり自由のご飯を大盛りにしてぺろりと平らげる金髪の娘さんはさすがである。メニューにあるビールは見るだけにして十一時の再出発まで五時間余り、早々と一畳足らずのスペースの寝袋に潜り込む。

ごそごそと動く音で目覚める、まずトイレに行く二〇〇円の有料である。ヘッドライトを着け寒さ対策の登山装備を調べていざ出発、早速に急勾配の岩場を手袋で防御しながら這い上がる。一時間かけて征服、続いて石壇状の上り坂、次はガレ場の登りまた岩場この連続である。だんだん空気が薄くなり油断すると目眩と吐き気が襲う。昔は「六根清浄」の念仏を唱えながら登ったという。これは腹式呼吸の理にかなった登り方で高山病対策になるらしい。小生は「よつこらしよ、よつこらしよ」

と遠慮がちに声を出しながら登攀を続ける。山道の前後は登山者の列が続きヘッドライトの明かりが蛇のごとく長々と並ぶ。昨年は世界遺産に登録された影響もありもつと多くの登山客が有つたらしい。「よつこらしよ、よつこらしよ」登りはまだまだ続く。

三〇分に一回の休憩をとりながらゆつくりと進み無理はしない。遙かに見下ろすと富士吉田の街の明かりが遠望される。そこには多くの人が住んでいる、今頃は深い眠りについているはず、その先にも街がある、そのもつと先に川や海がある、ここから夜景を眺めながら人生を考える、今まで生きてきた、そしてもう少し生きていく。日本一高い頂でそんな浩然の気を養うのも富士登山の意義なのかもしれない。

東の空が白々と明けはじめ、雲海が茜色に染まり出す。もうすぐ山頂に到着する、ガレ場に足を取られながら慌てずゆつくりと登山靴を運ぶ。「次の曲がり角が最後ですよ、その先山頂です。」ガイドの声が聞こえる。もう少ししの頑張りですべての苦勞が報われる。

頂上に到着、早朝四時二〇分。山頂には土産物の売店や軽食の店が有り飲み物の自販機もある。人も一杯いる、みんな御来光を待つて並んでいる。四時四〇分雲間から朝日が昇る、御来光に万歳の歓声上がる。何とも言えない素晴らしい景色、感激・感動の一瞬である。

「登り来て 我が手に昇る 御来光」

富士山はご存じのよう
うに山梨・静岡両県の境そびえる日本一の高山、山頂の剣が峰は三千七百七十六メートルで最も高い、立山・白山と共に日本三霊山の一つである。山頂は何れの県の所属なのか、正八合目より上は富士山本宮浅間神社の私有地となっていて県境は定められていない。また、多くの人の思い違いで富士山は登るより眺める方が良くなどと言われるが山頂からの素晴らしい景色は登った人にしか分からない。
後は下るだけ、ただしガレ場の下りは足を取られ滑りやすい。「下り六分ですよ」ガイドの音がする。最後まで気を抜かず怪我をしないように下山体制に入る。

九時三十分五合目に帰り着く、「お疲れさま」一緒に登った仲間達と声を交わす。各自で遅い朝食を済ませ十一時出発新宿に向かう。バス中では全員爆睡である。次は三年後の古希にもう一度富士登山を考えてみようか。



『酔いの徒然』（四二）

丸山酔宵子

『炎天下大暑の銀座通り』

今年65本目のロードショー『フランスアルプスで起きたこと』を見た後、冷え冷えのビールを指して、一目散に銀座7丁目のライオンへと日比谷から電通通りを横切って銀座へ。真っ青な空は雲ひとつなく、真夏の太陽がキラキラと銀座の石畳を照りつけている。熱気むんむん、真昼間とは言え、銀座松屋、銀座三越、和光そしてユニクロと、1丁目から8丁目までの真っ直ぐに伸びるお洒落な大人の街は、人、人、人……。至る所に大型バスが路上に停車し、いろいろな顔かたちの異国人たちがぞろぞろと出てくる。思い思いのカラフルなサマー

ルックにビーチサンダル履きで、5人から6人単位でゆつくりとペチャペチャ喋りながら闊歩している。アメリカ、中国、台湾、韓国、インドネシア、ヨーロッパ、オーストラリアなど……。

梅雨明けの大暑。平日午後3時ごろでは、地元サラリーマンや買い物客は見当たらず、外国人観光客が8割から9割を占めているだろうか。まるでシンガポールのオーチャードロードに在るのかと錯覚してしまう。将に『ジャランジャラン』（インドネシア語でぶらぶら散歩）状態である。

ジャランジャランの合間をぬって、一人の小柄な托鉢僧が、黒装束の袈裟をしっかりと着込み、編笠を被り、小さい鐘を鳴らして念仏を唱え、焼けた石畳を白足袋姿、ゆつくり且つ規則正しいリズムで、限りなく悠然と歩いている。藁草履も穿かず、白足袋だけで、それも汚れの

無い実に白が鮮やか。黒の前垂れには『高野山』と堂々としつかり白字で描かれている。

托鉢と言う宗教的寄付行為は、日本では歴史的に見ても市井では無許可で認められてきたことかもしれないが、現代では、いろいろ調べてみると、当局の『托鉢特別許可』を必要とするのだそう。銀座の目抜き通りで

の托鉢も、品位を保ちながらやらねば国際的にも評価されないであろうから、さもありなん……。

銀座ライオンに入ると3時とは言え、もう既に満席、ここも外国人で一杯。入口近くにやつと席を取るが、至る所でグループ客たちがソーセイジの盛り合わせやから揚げ、ピザを前に、ジョッキを「カチン、ガチャーン……」と合わせて、「カンペーイ、チアーズ、ズファー、サンテ、チンチン……」。空いている椅子や床には、ユニクロ、三越、マツキヨの大きな袋が置いてある。

つい1〜2年前までは、夏場の平日の3時頃では、未だ閑散としていて、麻の糊の付いた背広にステッキを持った老紳士とか、仕事の途中で、背広を手に持ったサラリーマンたちが、ジョッキを美味しそうに傾けていたものであるが……。

白足袋でゆるり托鉢大暑かな

酔宵子

ある自然科学者の手記 (41) 大橋望彦

大七は、嫌な顔つせず、親切に面倒を見て呉れます。母も伯母も針仕事を手伝い、二十日余り滞在して居りますと、或る日番頭が、母の顔を見ながら『私の考えですが、光子様も追々御年頃になられ、御縁談も在りましようが、拙宅の若旦那の嫁に下ざる訳には参りませんか。昔と異なつて、侍町人の区別も無くなり、殊に戦争以来お世話申し上げるのも何かの因縁で御座いまいし。昔の事はお忘れに成つて、御承知下されまいか。幸せに宅には別荘も在りますから、お決め願えれば、此処を御住いとし、御妹御様に御養子のある迄皆様をお世話致しますし』と申します。母は皆まで聞かず驚きまして、今までの御親切も、其の下心在つてと思ひますと、頼み難い人心にむごしまたが、じつと心を鎮め『御親切はかたじけなく御礼申し上げます。光には小太郎という定まった養子が居ます。どうぞ悪しからず思召し下さい』と断りました。

この様な経緯から、大七に厄介に成るのも具合悪くなり、幸いツキノキ町に貸家がありましたから、早々に引き上げ移りました。南部へ出立の時、例の出入りの大工の許に、勝手道具を預けた儘に成つて居りましたから、引取りに参りますと、鉄瓶にお釜の二品丈は残つて居りましたが、其の他は切売り払つてしまつたそうです。父の遺品家伝来の刀も、和田様から確かに御預かり致して置きながら、官軍に取られたとか、何と曖昧なことを申して居ります。今に成つて見ると、あの実直相な大工も疑わしくなり、世間が尚更暗くなつた様に覺えました。

兎も角、住馴れた故郷に帰り、例え狭い借家でも一家を構へ、家族四人が居住する事が出来ましたので、何と無く嬉しく心も

落着きました。然し扶持離れの身。稼ぐ親柱の無い家。母と叔母との針仕事の内職に頼る他ありません。先ず、呉服屋の鉄屋、中村屋、大七等から仕立物を貰ひ、朝早くから、夜は十二時頃迄働かれます。又知人の娘達に針仕事を教へ等して、一家四人がどうやら細い生活を立てて行つたのです。

よく明治生年養子小太郎が、東京へ修業に行くこと成り、私と夫婦の盃をさせて呉れと申出ました。嫌々ながら断り兼ね『年端も居かぬ故、盃丈を』と儀式は済ませたので御在います。

小太郎の上京後、老人夫婦で淋しいから、私に来て居て貰えまいかと、又嫌な事を言つて来ます。これも進みませんが、止むを得ず清治袋村の分家へ参りましたら、全く下女代わりの扱いで辛い目に遭わされました。塗物の手伝いをせよ、柿渋を作れ、霜夜に川水を大桶へ汲取ります。霜月後の寒風に曝されながら、荒仕事を致しましたので、手足に霜焼けや柿渋のかぶれが出来、それが許で、其の後長い間苦しみました。其の翌年小太郎は折角上京しても、勉強は名ばり、悪友に誘われてか、品川辺りで遊び暮した挙句、故郷へ無心ばかり申してきます。その為親父も持て余して、とうとう呼び帰されて仕舞いました。

其の帰国の途中若松を通りながら、私共の宅へ立ち寄りぬを、母が大変立腹し、之を理由に離婚の交渉を致されました。話しを付ける迄には色々の面倒も起りましたが、漸く此方の主張が通り、虫の好かぬ養子を離縁し、初めて私は、自由の身分となつたので御在いました。

『母 美和子』

境遇は人を創造るとか。人の性質はその環境によつて変化致します。然し持つて生れた性質は、どんな事があつても、そう変わるものではないと思ひます。意志の強固な人程環境に支配されても、性質を変えぬものと存じます。

素より女ながらも会津魂の凝つた母、二十六歳の若さで夫の討死に遭い、家は焼かれ、扶持に離れ、南部恐山の麓、罪人か無宿者の住う田名部へ移り、而も年頃近い娘と乳飲み子、老母を抱えて憂き艱難。普通の女ならば、其の境遇に耐え兼ねて、身の破滅となるのが当然でありましょう。

有金は騙され、住家に月洩る荒家。山柴を集め、海草を採り、黒米に昆布の粥を啜つて漸く其日を送るとん底生活に落ち、死ぬより辛い境遇に陥つても、昔の軍事奉行の奥方と言う見識は捨てません。貧しくても人に屈せず、卑しい心は微塵も起さず、皆を励ましつつ家を支えた其の苦心は、自分の母ながら、全く見上げたと存じます。

此の母なればこそ大参事の野田様から娘を修行に遣わせと望まれても直ぐに、二つ返事で差し出しません。東京へ連れて行くこと、御親切な仰せに対しても、一応はお断りをする見識を持ち、何処迄も負けじ魂が、心の底に残つて居たのでございませぬ。

尤も悪い人から騙り謀られたのが因で、他人を見れば、盗人と思えと言ひ猜疑心が、幾分かは手伝つて居たかも知れません。

然し生れながら男勝りの気性。家族には、自分より十歳も上の出戻りの小姑があり、中々面倒であつたにもかかわらず、父の戦死後は一家の主婦として、万事取り捌いて居つた手腕等は、良家の妻女には寸出来難い所であります。

又永年の習慣で女々しい所は少しもなく、勝負の二面に、愛着深く、同情心の強い、人に頼まれれば何でも引き受けると言う義心も、かなり強かつたと存じます。

晩年、私共が横浜に居住致して居りました時、暇で困るからと申して、横浜小学校の裁縫の先生を勤めましたが、生徒から敬い親しまれ辞職の時等は大層惜しまれました。其の時の生徒が、銀座の宮田時計店に嫁ぎ、家事取締まり方々女中達に裁縫を教え、て戴きたいと頼まれ、同家へ参つて居た事もございませぬ。

平素は穏和で御座いますが、理に戻り、道に背きますと、厳しく叱られます。

前にもお話しした様に、土屋新平叔父から、『父の遺言に背くか』と、言われた時、彼れ程苦しめられた分家の伴小太郎を養子に決められました。又あれ程親切な野田様のお世話、鈴木家の出世の基を断つて、若松の哀れ託住も辞せられなかつたので御座います。

土屋の叔父が怖い為だろうと思召すかも知れませんが、決して左様ではなかつたので御座います。小太郎が修業に失敗して帰りました時、若松を通りながら私の宅へ立ち寄りぬのをたてに、母から分家へ、小太郎の養子離縁を厳談致しますと、またぞろ土屋の叔父から父の遺言と、大変な剣幕で嚴重な掛け合いがりましたが、母は頑として承知致しません。遂に叔父は叔父姪の縁を切るからと迄脅かされましたが、それで宜しいと、母は意志を貫徹されたので御座います。

此の様に、一家の主婦として立派に、とは申せぬ迄も、人の口車に載らず、世間から軽蔑せられず、安泰に子女の養育を果し、一家を保つて行かれました。尤も初めは、年若な後家と小娘ばかりの家でありましたから馬鹿にして、詐欺や陰謀で、家庭を紊す様な企てをする者もありましたが、却つて母に看破され、二度と出入りの出来ぬよう怒鳴られた者も三に止まりませぬ。遂に鈴木家の後妻はしっかり者で、滅多な口は聞けぬと迄評判になつた程で御座います。

しっかりした女丈夫であつたからこそ、女子ばかりの鈴木家に謹も付かず、立派に繁栄する事が、出来たのだと存じます。彼を思い、之を思いますと、母は、全く鈴木家の柱石に違ひなかつたと信じて疑いません。

絹の話 (59)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と更紗

【更紗がやって来た】

更紗という言葉は、異国情緒を感じさせる耳障りの良い響きです。いったいいつの頃、何処からやって来たのでしょうか。足利尊氏がインド更紗を刀の袋にしたといういい伝えはありますが定かではありません。14世紀に沖縄の尚家が琉球を統一して琉球王国を築き、明や朝鮮と交易を盛んにした交易品の一つと考えられます。

その交易は季節風を利用して中国の福建に渡り、沿岸を南下し、シャム、マラッカ、ジャワ、ルソンを回り、海流に乗って琉球に帰るといふもののようにでした。

その時琉球船はマラッカでベツガラ産の布を積み込んで、薩摩を経由して室町幕府にも届けていたと思われます。安土桃山時代になり西日本で綿花の栽培が盛んになり始めて来た頃、日本に入港する南蛮船、紅毛船によって未知なる更紗がもたらされるようになって来たのです。

彼らはヨーロッパから喜望峰をまわり、インド各地で香辛料獲得を主な目的にしながらも、これからまわるマラッカ、ジャワ、ルソンなどで高く売れそうな品々を積み込み、交易をしながら極東の日本にたどり着いたので

す。その積み荷一つが色々な更紗であったのです。

特にサントトーマス、やマスリパトナムなどで作られる薄手で鮮烈な赤や緑の模様の上に金糸銀糸で刺繍が施されている極上の更紗を地元で『サラッソ』と呼んでいた事から、(鬼更紗(太い糸の厚地の物)なども含めて)日本ではそれらを『更紗』と言う様になったのでしょう。ちょうどその頃、日本では草木の染料を使った絹の染色が、辻が花を代表にする様に百科撥乱の時代を迎えようとしていました。

信長や秀吉はじめ派手に着飾る風流の世相の中に、絹とはまるで違った強烈な感触の更紗に出会った人々は、いとも不思議な鮮烈な風合いの虜になっていったようです。秀吉や婆婆羅大名は陣羽織などに利用しましたが、高級品は絹より高く、一国にも勝る高価な物もあり、茶の湯の道具を包む事に使われて、有力大名が名物裂と称して競って手に入れようとなりました。その中でも井伊家のコレクションは今日まで伝わり、当時を知る上で大切な物となっています。

【シャム更紗】

交易が大きな富みをもたらす事が実証されて来たので、秀吉は倭寇を含めて民間の由な交易を禁じて、公的な交易をする御朱印船を出し、富みを管理しようとした

した。大名では薩摩、商人では角倉了以、茶屋四郎次郎などが活躍し、アユタヤ（タイ）では日本人町が出来るほど大勢の日本人が渡り、山田長政などの活躍は有名です。そこからもたらされた更紗が「シヤム更紗」でした。

実はこの更紗はシヤム製ではなく、インド製だったのです。インドの人達は古くから更紗を世界各地に売りさばっていたので、その時代その地域が好む柄や色彩を取り入れて輸出していたのです。

シヤム更紗はシヤムの小乗仏教の影響を受け、仏像を意匠化したり、草花や動物などを極めて精緻に表した物で、インド製作の更紗の中でも極めて繊細な製作と云われています。江戸初期には既にそれを模した「シヤム口染」が京都の名産になっていたほどです。

他にも堺更紗、鍋島更紗等々日本各地で更紗が作られました。

【縞、島、緋、飛白（かすり）】

更紗と一緒に当時の日本では見かけない、縞模様の緋が大量にサントトーマス（サントメ縞）やマドラス（マドラスチェック）などが届く様になっていました。単純な緋ですので、細かな模様を織り出す飛白とは違い、生産性が高いので、量産品を船で琉球など島伝いに運ん来ていました。ですから縞模様を古くは「島物」と記して

いました。

【更紗の下地染め】

絹や毛は蛋白成分で出来ているので、茜などの天然染料に染まり易いのですが、木綿は藍を除いて草木の染料には染まり難いのです。ところがインドではインダス文明の頃から木綿に鮮やかなインド茜の赤を染めて一般に使っていた様で、その製法は綿布を先ずミロバランの様なタンニ木酸を含む染料で染め、更にミョウバンと鉄分を含んだ液に浸けると、インド茜の赤や黒が強力に染まり、強い紫外線にも耐えられる更紗が出来るのです。当時のインドの木綿の染色は世界に類を見ない技術を持っていました。

【揺るがぬ絹】

更紗が当時の日本の染色界に衝撃的なインパクトを与えました。いつも正装は絹であり、渡来初期を除いて貴族はもとより武家の表の衣装にはならなかったのです。以来、商業用にコートドレスなどの表に使ったのが昭和50年代エスニックファッションのはしりをリードアトリエトレビでした。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 四十九回

「月虹」 鮫島 満

石田に帰ったのは偶然この日であったという。

阿岐夫はこの時のことを次のようにも詠んでいる。

二十四 金子阿岐夫 1

復員せしその夜茂吉先生に会ひまつり軍服のままわが畏みき 金子阿岐夫『黄の光』昭和五二年

八月二十四日わが復員の日茂吉先生にはじめて会ひし日
母が手の単ひとへをすつと着流しにわが前に立ちし茂吉先生
ああ今日は六十五年前茂吉先生にはじめて会ひし日
『是非に及ばず』平成二十二年

金子阿岐夫は本連載の四十二回から四十七回まで扱った板垣家子夫の次男である。茂吉が疎開先の上ノ山金瓶から大石田に移居するのは昭和二十一年一月三十日であるが、その前に一度打ち合わせのために大石田を訪ねている。この時のことを板垣は〈随行記〉に、「先生を初めて私の家に迎えたのは、終戦直後の八月二十四日である。私はその時は役場を退職したものとひとりで決めていた。終戦の詔勅を役場事務室で聴き終えたと、すぐ町長に退職の申出をし、それなり帰宅したまま出勤してない」と回想している。板垣は役場勤務を空白の年月と考えていたのであり、この時は大石田に移居してくる茂吉を迎えることに新しい生き甲斐を見つけようとしていたのである。

仙台陸軍幼年学校三年生であった阿岐夫が復員して大

茂吉と会った日が昭和二十年八月二十四日であったことが忘れられないというのである。この時点では茂吉はまだ二藤部家の離れ（後に聴禽書屋と呼ばれる）に住んでいず板垣の家に泊まっている。二首目は、阿岐夫の母がこの日のために急いで縫ったひとえの着物に着替えた茂吉の姿を詠んでいる。板垣が〈随行記〉に「二十七日の夜は、昭雄の今後の方針なども相談にあずかったように覚える。ともかく山形高等学校で行う編入試験を受けることに決めたのもこの夜であった」と記している（「昭雄」は阿岐夫の本名である）。〈随行記〉の別のところでは「二男昭雄は陸軍幼年学校が廃止になったので、山形高等学校に志望したが、この編入学が出来ず浪人して家におり、将来医師になる方針を立て」とも記している。茂吉が大石田に移居してからは父の都合の悪いときは

阿岐夫が茂吉のところへ行き、ときには入学試験のためにドイツ語を教えてもらったりしていた。のちに医師になった阿岐夫にとって茂吉は人生の大きな師という存在であったから、六十五年前の初対面の日のことを忘れることができないのである。

幾たりか雪踏みし跡たどりゆき茂吉先生の墓の前に立つ

『黄の光』昭和四十五年
茂吉先生の墓に凍りつく雪を払ひ香を束のまま雪に立てたり

アララギはみ墓蔽へり植ゑしとき一握りほどの太きなりにき

「茂吉忌」と題する一連中から抜いた。この時点では茂吉の墓は東京青山墓地と上ノ山金瓶・宝泉寺の二箇所にあつたが、ここは金瓶であろう。茂吉の祥月は二月であるから金瓶は雪の中である。三首目は茂吉の墓の横に植えたアララギの木を詠む。結句の「き」からみて、作者も昭和二十八年の植樹に立ち合ったであろうことがわかる。

川沿ひに歩み下りて茂吉先生としばし休みし杉林見ゆ

日盛りを杉の木立に入りゆきて隠沼（かくりぬま）あればそこに憩

ひき

茂吉の大石田滞在中（昭和二十一年、二十二年）の思出を詠んでいる。明確に場所をいうことはできないが、杉林や隠沼から、茂吉が特に好んで足を運んだ下河原かと思われる。茂吉はここに一人でも来たし、阿岐夫の父・板垣を伴つても来た。

板垣の〈随行記〉には、「夕食後にはカクにさんと昭雄を連れて下河原に散歩もした」（昭和二十一年七月十七日）とある。「カクにさん」は茂吉の住む聴禽書屋の大家のことである。また、翌日の項には、茂吉が朝やつて来て「これからいよいよ本業開始だつす。少しづつ歩いて廻り、足を慣らして大いに大石田の歌を作るんだつす」と言ったことを書き、「先生には念のため昭雄を従わせるようにした」と書いている。

茂吉も日記に十七日に続き、十八日「朝食後、一寸板垣氏二寄り、ソレカラ昭雄君ト最上川ノヒロ河原二行キ、小沼ノホトリノ杉林二行キ、午前中時間ヲツブシタ」と書いている。「ヒロ河原」は「下河原」を誤つたものだと板垣は言っている。

阿岐夫は茂吉が「わが病やうやく癒えて歩みこし最上の川の夕浪のおと」「かの空にたたまれる夜の雲ありて遠いなづまに紅くかがやく」など、『白き山』の名作をなす場面に付き添っていたということになるのである。

楽しい時間 35

山本紀久雄

2015年8月31日

手仕事への回帰(3)

7月27日(月)、2月以来久し振りに、国立民族学博物館の吉本名誉教授と渋谷・ヒカリエで食事した。「今日は福島調査活動からの戻りです」と、相変わらずの黒づくめの服装で、話題は織物に集中する。東北タイではじめて会った時と全く変わらない。情熱にブレがない。見事だと思う。どうして、吉本氏はこれほどまでに織機に熱心になったのだろうか。

それについては、日本経済新聞・文化欄「織物、手仕事の技は多彩」(2012年9月5日)で吉本氏が次のように語っている。

「織物の織りあがりのかたちが四角形であるという私の理解が覆されたのは1970年のことである。京都市立芸術大学の学生で、探検部に所属していた私は、はじめて海外調査でインドネシア東部のティモール島を訪れた。そこで見たのが輪(りん)状の織物だった。

それは2本の棒にタテ糸(経糸)をラセン状にかけわたし、タテ糸の上の層にヨコ糸(緯糸)を通して織られていた。

輪状に織りあげられた織物は、稀に輪状のままで儀礼用の供物や衣装の一部として使われる例もあるが、多くは織り残

されたタテ糸部分を切断して四角形の織物として使われている。

インドネシアでの輪状の織物との出会いは、広島で京呉服の商家の息子として育ち、大学の染織科で学んでいた私にとって大きな驚きであり、その時に生じた織物とは何かという命題は、その後民族学研究の道を歩み始めた私のライフワークとなった。

以来、吉本氏は「織機と織物と織り技術」について調査・研究を続けられ、今では世界の第一人者として認められた存在となっている。というより吉本氏しか、この分野で博学な人はいないという唯一の存在になったのだから、これは人の生き方として最大の強みであろう。ある分野で「極める」という頂点に立つ、つまり、自己の存在意義を世間が認めたということになるのだから、生き方目的を達したと言えるのではないか。素晴らしい。

草鞋も織物だ

また、吉本氏はワラジ(草鞋)も織物だという。

エッ、草鞋も織物か。本当か。これに対する回答は以下である。

「織物とは、張力をかけたタテ糸にヨコ糸を組み合わせたモノ」

というのが吉本氏の基本概念であるから、これに当てはめれば草鞋は織物だという見解である。草鞋は通常「編物」と理解しているが、吉本氏は作り方から見れば「織物」である

という。さすがに思考方法が異なる。

さらに、織物の形もいろいろあるという。

「織物は、わが国では一般に、矩形であると理解されてきた。しかし、世界各地で織られてきた織物のうちには、矩形の織物以外に、輪状の織物、杖状の織物、管状の織物、楕円状の織物、髻状の織物など、多様な形状の織物があり、草鞋は楕円形の織物に包括される」

ところで輪状の織物とは下の写真で、説明として「輪状に織り上げられたタテヨコ緋(インドネシア、バリ島トウンガン村)」とある。「手織物と織機の通文化的研究2010-12013」国立民族学博物館『民博通信No.132』

ここまで吉本氏の織物に対する見解について述べてきたが、織物に興味ない人には何の価値もないだろうと失礼ながら思った。



『最新樹木根系図説』

だがしかし、先日、歌人で京都産業大学教授の永田和宏氏の「根の世界に魅せられる」(日経新聞2015年2月25日)を読みハタと手を打った。以下、要旨を紹介する。

「本は自分が読みたいから買うのが普通だが、時に、これだけはぜひ手元に置きたいという衝動に駆られて買う本も

ある。美術書などでは普通だが、学術書なのにそんな思いから衝動買いをしたものがあつた。

苧住昇著『最新樹木根系図説』である。樹の根の本。根のことしか書かれていない。それがB5判で、総論九四〇ページ、各論一〇〇ページ、厚さ十三センチにもなる。

何といつても私のような素人には、本書の圧巻は各論である。五六二種の樹木の根の細密な写生、これには圧倒された。敵は地中深くに潜んでいる。写生するためには、当たり前のことだが掘らねばならない。根を傷つけないよう舐めるように掘り進むのだろうか。気が遠くなるような話だ。

たとえば冒頭近くのモミの木。三メートル余の深さまで掘って、根全体の細密なペン画(?)が示され、それが息をのむほどに美しい。直径一〇センチの太根から、直径〇・二センチの細根まで総本数三〇〇本だという。一〇センチ刻みの深さでどんな径の根が何本かまで表に示されている。何という壮大な研究であり、研究人生であろうかと感動し、つい自分たちの研究と引き較べてしまう。八万円は大いに安い買い物なのであつた」。

永田氏が述べるように、苧住昇氏著書は多くの本と異なる特殊性分野を描いている。同様に、吉本氏も織物という特殊性世界の分野を徹底的に追及している。しかし、そこから両者は普遍性を見出している。その普遍性とはどういうものなのか。それを次号でお伝えする。

楽しくマナー ④

辻 照子

「日本酒で乾杯」

今期のマナー講座はいろいろなお酒が登場しバラエティーに富んだ内容となります。

オン・ザ・テーブルで、日本酒を涼しげなグラスとともにセッティング。

5月にしては夏日のような土曜日の午後、まずは、冷たいスパークリング日本酒で乾杯。

日本酒、ビール、ワインなど飲み物によって乾杯マナーの違いがありますが、今回はお燗をせず、冷やして、冷やしたグラスで試飲をすることにします。

正式な乾杯の仕方は、乾杯後すぐ飲むのではなく、グラスを目の高さに挙げ、周囲に目礼し、ひと口飲み、唱和した人を目礼、また周囲に目礼し静かにグラスを置く。

結婚式など、お祝いの席ではそちらに向け、軽く会釈をすると「おめでとー」の気持ち伝わります。

乾杯をその場で急に頼まれ、言葉が見つからない時は、「皆さんの健康のために。」の発展を祈って」と、グラスを挙げ、長々と話さないのがスマート。

フランスでは「A votre santé」。英語では「For your health」といずれも健康を願って乾杯をします。

古代ヨーロッパでは、お酒の中や、部屋にいる悪魔を祓う為に、グラスをぶつけ、悪魔が嫌う音をわざと立ててから、飲んだのが乾杯の始まりとされているのですが、正式にはグ

ラスをぶつけ「カチーン」と音をたてるのはタブーです。高価で、薄く繊細なグラスは壊れやすいですし、もし結婚式でグラスが壊れたりしたら、お二人の門出にケチがついてしまいうそう。

ただし、厚手のビアジョッキやカジュアルな場面では気にせずグラスを合わせて音をたてて盛り上げるのも良いかもしれません。

乾杯といえば、フランスに赴任して間もない頃、数組のご夫婦をディナーに招いたことがありました。

食前酒をサービスして次はテーブルについてお食事、グラスに注いだお酒で乾杯となったはずなのに、何故か戸惑っている様子。

その時、キッチンで次にお出しする仕度していた私が、「どうしたの？」と顔を出したら、皆さん、にこやかに「乾杯」、お食事が始まったのでした。

夫が席に居れば良いだろうと、キッチンに入っていたのは、大変失礼な事だったので。揃って一緒にお食事し、会話するのが一番のマナー。

それからは一緒に乾杯ができるように、前日までに、殆どの準備を済ませおくようにしたら、当日がとても楽しくなりました。

招き招かれたり、パーティーやレストランの会食でいろいろな経験を積んだ遠い昔が懐かしい。

「日本酒は開栓したら何日間位、保存できるんですか？」
お酒を美味しく呑むことに情熱をかける生徒さんから質問。

「今回、用意した加熱処理してない生酒、スパークリング日本酒は、開栓したらなるべく早く呑んでしまうのが良いで

しょう」

「開栓後、冷蔵庫の振動のない野菜室などに保存して1週間〜10日位まででしたら、ワインは美味しく飲めるのですが、それ以上経ったらやはりお料理に使うと良いです」

殆どのお酒は開栓前でも、光、振動、温度差、空気を嫌うので、15℃以下の冷暗所に保存すると良いです。

この日のレシビは、ピクニックで季節を感じながらも、作り置きして食卓でも、どうぞ。

*桜えびの春色ライス

材料(4人) ご飯2合、桜えび 20g、いり白ごま 大匙2・5、醤油 大匙2、絹さや20g、塩 少々、絹さやは筋をとり、塩 少々入れた熱湯で茹でて水にとり、細切りにする。

炊立てのご飯に桜えび、ごま、絹さや、醤油を加えてきるように混ぜる。

*たことわかめの甘酢

材料 茹でたこと 180g、わかめ 20g、きゅうり 1本、醤油 大匙2、みりん 大匙1、酢 大匙2、薄切りのたこ、熱湯をかけひと口大に切ったわかめ、細切りのきゅうりを同量の醤油・酢と半量のみりんを混ぜ合わせ、和える。

*ごぼうの肉巻き

材料 牛蒡1本、牛肉薄切り 200g、片栗粉 少々、サラダ油 適量、酒、大匙1、はちみつ 大匙1・5、

醤油 大匙1・5 バルサミコ酢 大匙1、水 50ml、4つ割りにしたごぼうを酒・はちみつ・醤油・みりんであらかく煮、薄切り牛肉で巻き片栗粉をふり転がしながら中火で焼き、醤油・バルサミコ酢・水で煮からめる。

試飲する日本酒は

*上撰ねじ栓生貯蔵酒

米酒 山田錦

*淡雪スパークリング

*特別純

ズーと以前は、一升瓶の日本酒が一般的で、一種類の酒を色々な料理とともに飲むことが多かったですが、今回のように、小振りでおしゃれなボトルを何種類も用意できる場合は、料理との相性を考えてサーブすると、より美味しい食事となるでしょう。

「桜えびの春色ライスと生貯蔵酒」「たことわかめの甘酢とスパークリング」「ごぼうの肉巻きと山田錦」それぞれ合せると、バランス、ハーモニー共に抜群です。

次の料理を美味しく頂くために、口の中をリフレッシュする役目もお酒はしてくれませう。



「歴代天皇御製歌」(四十二)

貫名海屋資料館

『近衛天皇』第七十六代・在位一二四二年(三歳)―一二五五年(十七歳)

近衛天皇は、鳥羽天皇の第九皇子、三歳で即位。十七歳で早逝。在位中すべて鳥羽法皇が政事をとられた。平安時代中期以降、天皇が幼少で即位されることが多く、政争に供された。

恋しともいはゞ心のゆくべきにくるしや人目つゝむおもひは

新古今集

忍ぶ恋を詠まれた

浮雲のかかる程だにあるものを隠れなはてそ有明の月

千載集一〇〇〇

夜が明けてしまえば見えなくなってしまう月を、せめて少しだけでも長く見ていたいものを

虫の音のよわるのみかは過ぐる秋を惜しむ我が身ぞまづ消えぬべき 玉葉 2321

虫の音は弱り、過ぎてゆく秋を惜しんでいる我が身こそ先に消えてゆきそうなことよ。

「歴代天皇御製歌」(四十三)

貫名海屋資料館

『後白河天皇』第七十七代・一一五五年(二十九歳)―一二五六年(三十二歳)

後白河天皇は、鳥羽天皇の第四皇子。在位四年で讓位されたが、以後、二条・六条・高倉・安德・後鳥羽の五天皇の院政を執られた。この時「保元の乱」は源平二氏の力が増し、以後七百年に及ぶ武家、幕府による政治となった。後白河天皇は、「梁塵秘抄」二十巻を選述。仏教を厚く信奉され、東大寺の大仏再建に取り組まれた。

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

千載集

わするなよ雲は都をへだつともなれてひさしきみくま野の月

玉葉集

熊野三山へ三十二度の御幸をされた。

をしめども散りはてぬれば櫻花今はこずゑをながむばかりぞ

新古今集

落柿舎(1)

夏目勝弘

去來の「落柿舎記」には、庭に柿の木四十本あり、その実が一
夜のうちに殆どおちつくした。それが落柿舎の名の由来とある。

元禄四年(二六九)四月十八日より五月四日まで滞在した落柿
舎の情景を、芭蕉が日記体の俳文で書いてる。

(略)此地閑寂の便りありて、心すむべき処なり。彼去來物ぐさ
きをのこにて、窓前の艸高く、數株の柿の木枝さしおほひ、五月雨
漏^たりて豊障^{とよむら}子かびくさく、打臥^{うちふし}処もいと不自由なり。(以下略)

○五月雨や色帯へぎたる壁の跡

の一句を置き、落柿舎を立ち去る悲哀を詠みそれから三年、元禄
七年三度目の落柿舎へ。

この滞在中の(旧)六月十五日(今年の新暦では七月三十日)
下清滝(落合)に、身の回り食糧の心配してくれる。農民の俳
人野明の案内で夏の夜の観月を体験することになる。

今回計画したのは同じ日に同じ道を歩いてみる。夜は無理なた
め昼間とした。

現在の落柿舎は整備され、生活すれば出来る状態。庭には大
木となった柿の木が二本残っている。大きな果実はもう成らない。

柿柿舎の現状をカメラに納め、落合に向け出発、五分ほど歩き、
右手に弘源寺の墓地、そこに去來の墓があり、墓地と平行に下り坂
を二百メートルほどの所に、西行法師の出家当時の草庵の跡に西行
井があり、竹の簀で蓋がしてある。透間より水があるように見えた。

先ず念仏寺をと緩やかな上り坂を汗を拭きつつ行くと、酒屋が
ある自販機に直行、缶ビールを手にする。

念仏寺への石段の日陰に腰を掛け小休止をする。山中での酒屋

に感謝。芭蕉の汗一句

○汗の香に衣ふるはん行者堂

目安としてきた平野屋の所を左へ、いよいよ六丁峠にかかる。杉
木立のなかの上り坂はそれほど急ではない。

左側に清水が流れ涼しさを感じさせてくれる。

芭蕉と野明も落合の月の出を午後八時ごろと、それに合わせて
この坂を上って行ったことだろう、昼でも暗い木立の道、嵯峨野の
村人が素晴しいという。月の出の話しながら、当然俳句の話
などもしたのであろう。

いよいよ峠越え、落合への下りは変急な坂道、帰りにまたこの
坂を上るのかと思うところの暑さでは諦めが頭をもたげる。

なんとか落合に道き、月の出の方を思い谷間の狭い空をしぼし
ながめていた。

○大堰川浪に塵なし夏の月

この句を死の三日前に推敲して

○清滝や波に散込青松葉

芭蕉が芸術への執念をみせた、この一句に相應しい場所を求めて清
滝川沿いの、道なき道を上清滝に向うこととした

この時点で上り八丁の峠越は諦め、上清滝までの、六キロも岩
場の道が多いが、川沿いのため吹きぬける風が心地よい。途中にて
マウンテンバイクを担ぐ青年に合う、この先石場がつつくと言うと、
笑顔で頷き去って行く。

この地方の松は赤松ばかり、芭蕉の見たのも赤松であろう。今
は特に松の葉の緑がもっとも美しい時。

上清滝からはバスそして新幹線で豊橋まで、いつもの店で体と咽
を冷しながら、今夜の満月を見ている。芭蕉の見た月とまったく
同じ月である。三百二十年前の満月と。

「氷魚」のことから (17) 岡本八千代

今年の夏は、私にとっても戦後七十年の特別の思いが浮かぶ。形原小学校（国民学校）の校庭で、あの玉音を聞いた時のことが。女学校の友だち松本さんと私は思わず二人で手と手をしっかりと握り合って、互いに何かを覚悟しているかの思いが——。そして、私は再び勉強しようとして、現在に近づがってきたような気がする。

そうして今は「こうのとりの」というロケット（国際宇宙ステーションに食料などの物資を運ぶ）が打ち上げられて、現在宇宙ステーションに滞在中の油井亀美也氏によって（二十四日夜）無事キャッチされたということに感動している私である。この感動は、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」へと流れてゆく私の心。

それは、「幻想」の世界へとつながってゆくのもあった。辞書では、「幻想」は、①とりとめもない思い。夢想。②現実でないことをあるように感ずること。とある。

子規の写生説も。観たものをそのまま写すのではなくて、自分の心の動きをくりこんでゆく、つまり幻想の働きがあることをいうのではないか？とおもう。子規にしても賢治にしても幻想の働きが培われているように思う。

現実と幻想がからまって詩心が生まれてくるような気がする。さて、子規の東京での生活からそれを探ってみよう。

子規は松山の中学校を中退して、上京した。上京後の子規はまず、赤坂丹後町の須田学舎に入り、次いで共立学校に入学した。当時の共立学校には高橋是清氏が英語の先生として、パーレーの「万国史」などを講義していたそうである。また、この学校で、「莊子」の講義を聴いて、「こんな面白い本はまたとあるまい」と思ったそうで、彼は哲学を勉強したくなったのもこの頃であった、とか。（彼の書いた「哲学の発足」より）

明治十七年（十八歳）の七月、大学予備門の試験を受けて及第した。同級生でこの試験を受けた者が数人あったが、合格したのは菊地仙湖（謙二郎）氏と二人だけだった。しかし、第二級であった彼は、試験に対する自信がなくて、殊に英語の力に不足を感じていたらしい。戯に受けてみるつもりであっても、意外にも及第したのだとある。

試験は幸に通過したが、やはり語学の力が足りない事を憂いて、十七年の夏は本郷の進文学舎に通って英語の勉強をしたのだった。その時、「ユニオン読本」の第四を講義されたのが、坪内雄蔵氏であった。彼は、「先生の講義は落語家の話のようで面白いから、聞く時は夢中で聞いている、その代り余らのような初学の者には英語修業の助けにはならんだ」と。また「当時は、数学の時間に英語以外の言葉を使わせぬ規則であったので、幾可学よりも英語の力で落第したという方が適当であろう」とも、随筆「墨汁一滴」の中で書いている。——。

以下次号へ。

ことのはスケッチ (442) 今泉由利

『天田愚庵』⑨ 年譜

△明治三十七年 (一九〇四年) 愚庵五十一歳

○二月二日『童謡』二十首を『日本』新聞に発表。

政府人仇とはかりていつまでか君をあざむく民を欺く位のみ人のつかさと登りつめことわり暗き大臣等ほも久米の子よいのち惜しくば太刀を解け黄金欲しくば商人となれ

頭には雪もみちたり年普く政府にをれば蔵も満ちたり愛我我巡り逢へりと父母のその手を執れば夢はさめにきちちのみの父に似たりと人がいひし我眉の毛も白く成りにき

かぞふれば我も老いたり母そはの母の年より四年老いたり

経もあり仏もあれば我もありこころのおくに亡人もあり

○俄に発熱し、呼吸促進。医師を迎え加療。

○二月十日。西村真明に「春月」を返す書簡を書く。

○二月十二日、藤原忠二郎を招き、草庵の処分を果し、小川亭へ借金二百五十円を返し、残金を二、三十円から百円くらいに包み「金子少々平生の御厚志に酬い度御笑納被下度候」手紙を付し、旧友知己に分送する。

○一月十三日朝、「氷塊向水散、鉄骨苔穿、月下人尋否、梅花自処烟」と認めた。

十三日夜、空漠たる寂寥感。自作の詩歌を揮毫、半紙約三百枚。知友に頒るため。

○一月十四日。遺言の覚書を自書。

一、金銀米穀に不足なければ今日より一切贈物を受け不申候

一、御見舞の御方は二面の後直ちに御引取下被下候が第一の御心切と存候

一、死後は遁世者の儀ニ付葬式を為すを許さず
一、又塔を立つるを得ず

一、學術に補益ありとせば解剖するも不妨
一、遺骸は二三の法弟にて荼毗せしめ、近親と雖も埋葬するを許さず

右の箇条何人も容喙するを得ず

○一月十五日。この朝より薬餌を絶ち、二十名ばかりの看護人や見舞の人に「手を握つて挨拶し、謝辞を述べた。

○一月十六日。法弟に身を浄めさせ、滴水禪師遺贈の白衣と麻の法衣を着けた。その夜、時々脈が絶え、医者がカシフル注射をすると、正気つき「また注射をしたな。いつまでおれを苦しめるのだ」と法弟を叱つた。「いつまでも逝かぬなあ、みんなに迷惑をかけてすまぬことじゃ」と言つて目を閉じる。

○一月十七日。午前十一時過ぎ、法弟の策堂、実堂を呼び、

二人をうながし読経せしめ、その経の終わらぬうち午後零時十分。享年五十一歳。文人、禪僧、天田愚庵の示寂。

給はな」
巡礼行中、二度も咯血をしたものの、脚力のみで遍歴した。

○愚庵辞世の歌。

○陸
春されは君を尋ねて須磨の浦朧月夜に相語らばむ

○夏日漱石、愚庵に詠んだ句。

○愚庵
独り見れど飽かむ月夜をさす竹の君と二人し見らくはよ

一東の韻に時雨るる愚庵かな

○陸羯南
愛子我巡り逢へりと父母のその手を執れば夢はさめにき

○遺骨は天竜寺に納める。

○愚庵
夢ならば継ぎて見ましと我思へど音のみ泣かれていぬが

○遺言に、葬儀、塔の建立を許さずと記。

○愚庵
てぬかも

○日露戦争勃発。

○愚庵
石の中にかき籠るともかぞいろの通ふ夢路の絶えむと思

○小泉八雲没。

○愚庵
へや

○愚庵は旅に暮らした。北海道より台湾まで、日本全国隈なく・・・多くは、父母妹の行方を探す旅だった。

○愚庵
黒髪のしろくなるまで年を経て再び君に逢はむと思へや

○父母と見れば夢なり夢にだに其面影よ消えずもあらなん

○愚庵
今日君に巡り逢ふごと父母にめぐり逢はなむ君に逢ふ如

○花薄招くかたこそ床しけれ尋ねる人の跡もなければ

○愚庵
驚の声ばかりして山寺の春はしづきものぞありける

○我袖も濡こそまされたらちねを恋い渡す子がかいの雪に

○愚庵
黒染の麻の衣の朝な朝な手向る花の露に濡れつつ

○愚庵

○愚庵
法の声日にけに聞けばいと楽し仏さびすと人はいふとも

○真幸くて在せ父母御仏の恵みの末にあはさらめやも

○愚庵
み仏に仕へむためと丈夫が弓谷にかへて握る数珠の緒

○神漏伎のかしこくはあれど千五百人の罪も消えなんしら

○愚庵
数珠の緒の玉のあな玉左手の手首にまけば音のさらさら

○ゆきのごと

○愚庵
百あまり八の障を玉にぬきて手ならず我に障りあらめや

○陸羯南

○愚庵
も

○旅僧の心やすけや冬木立

○愚庵
も

○三十余三の御山の御仏に仕へまつらく父母のために。衆

○愚庵
も

○人間の煩惱

○愚庵
も

○衆

○愚庵
も

編集室だより【二〇一五年 八月】

三河アララギ賞 弓谷久子様

くちなしの葉にしっかりと止まりをり未だ新しき蟬の脱
け殻

前後左右：過去も未来も：見ゆるもの見えざるもの：
穏やかに把握され、そこから迸るお歌が素敵です。沢
山の心をお教え下さいます。

○地球が始まって四十六億年といわれている。その間を、たえず
大きな、ひっくり返るような変動が起り、今、私達人間が住
む地球になつて居るけれど、いつ大きな変動がやってくるかわか
らない。人間の続く間を、おだやかでありますように。

○第七回、奥多摩アートフェスティバル「おくてん」。今年も参
加させていただく。近所の額縁屋さんの車で、私と作品とを、
奥多摩まで運んでいただく。

毎年このことなのに、その都度、新しい快適な道が出来、高層
建築が並び増え：景色が変わる。世の中は、私を置いてきぼり
にして変化する。めないで、参加していよう。

○奥多摩で活動する様々なアーティスト達が、自らのアトリエ、
工房、ギャラリーを開放し、奥多摩の木から、土塊から、風
景から：作品を造りだし、素晴らしいアートの祭典なのです。

○幕張ビーチ、サマソニックに紛れ込んだ。マリンスターダムにぎっ

しりの若者達が、アーチストと二体になつてつくりだす大音響。
この日のうろこ雲にまで届いたにちがいない。こんなことが今
起こっているというのを、我身に教えたかった。けれど、ひと
りよがりの「じやま」だったことだろう。

○岩手県関市、江戸時代から続く「世嬉の二酒造」より、お
送りいただいた。江戸時代の横綱「谷風」の後援者の蔵元で
あり、明治天皇が平泉に行幸されれば休み処であり…。
栗駒山系の雪解け水と、稲作に恵まれた地の米を、南部杜
氏が醸した「やわらかいお酒」。

○今は、ご自身の国のこととして、ドナルド・キーン氏の、日本
の憲法が制定された経緯の記事を新聞に読みました。マッカー
サー元帥は、日本滞在中、東京を離れることなく、どのよう
に日本を平和の国にしようか：考えておられたそうです。そ
して、「戦争を二度としない」「天皇制を残す」「男女平等」：
日本の人の考えを反映しながら憲法は出来上がったのだそう
です。

日本人が古典や文楽、能といった伝統芸能に魅力を感じなく
なつてきていて、国文学を専攻する学生がほとんどいないそう
です。日本人が古典を読めなくなつてしまふ。入試対策で文
法ばかりを教えるからです、と。

ドナルド・キーン氏の研究テーマの二つ、松尾芭蕉「奥の細道」
の東北には特別な思いをおもちです。「東日本大震災」に大
きな衝撃を受けられ、日本に移住をされました。

日本をお教えいただいています。

和菓子街道（108）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(4)

市野からほどなくして、姫街道は三方原の追分にさしかかる。浜松市内の主要道が集まる大きな交差点で、真ん中には慶応4年（1868）造の大きな道標が建っている。

三方原といえば、元亀3年（1572）の徳川家康と武田信玄の激戦で知られるが、江戸時代にはこの戦に因む小豆餅なる菓子が当地の名物になっていた。茶屋で休憩していた家康だったが、武田軍が迫ってきたと知り、銭を払わず茶屋を飛び出した。しかし、この茶屋のばあさまがなかなか凄い人で、逃げる家康を2キロも追いかけて、銭を要求したのだとか。後の天下人は武田軍からは辛くも逃げ切ったが、茶屋のばあさんからは逃げられなかったようだ。この時家康が食べていたのが小豆餅だったのだとか。今も小豆餅、銭取という地名



餡を練り込んだ求肥に黄な粉をまぶした現代版の小豆餅。

が残っているのが興味深い。

家康の食べた小豆餅は途絶えてしまったが、現在では姫街道沿いの和菓子屋あおいで小豆餅を再現して売っている。

◆あおい

住所：静岡県浜松市中区葵東1-6-7

電話：053-436-2365

お知らせ

▽十一月号の原稿は、十月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

▽原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目の送付をお守り下さい。

▽原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、原稿に同封して下さい。

▽原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

編集三河便り

連日の猛暑の日々に「熱中症」のニュースが多くきかれました。暑い夏を凌げば、秋がやってきます。夜はコオロギなどの虫の音もちらほらきかれるようになりました。

休養、快眠、適度な運動に気を配り、気持ちも新たに爽やかな秋を迎えましょう。(山口)

かさね吟行会

日時 十月九日(金)
場所 横浜(港の見える丘公園等)
集合 桜木町(JR京浜東北線)
南口改札口 十時半
申込 森岡陽子(03)3712・2800215

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様のために連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年九月二十五日印刷 第六十二巻 第十号
平成二十七年十月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子・森岡陽子

発行人
発行所

今泉由利
三河アララギ会

URL

三河アララギ発行所 〒一一四一〇〇三二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (03)五九二四一・二〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六・五六二二九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美